ザボロツキー

気狂い狼

そら！　常緑の宮殿の柱が
打ち倒されてゆくのが聞こえるでしょう。
ゲーテ[1]

1．熊との対話

　熊
常緑の館の
円天井は未だ破壊されていない。

人間共のおこぼれにあずかろうなどと、
檻に繋がれることはまだないのだ。

俺たちは気儘な樫の木の下で暮らし、
荒削りの知識に満足している。

飲むのはただの水ばかり、
太陽を讃えて歌っている。

狼よ、お前はどうなのだ？

　狼
犬の脇腹を裂いた後は、
星の流れるのを観察しているんだ。
もしぼくが足を上に突き出して
仰向けに横たわっているのを見つけたなら、
それはぼくの視線が
真っ直ぐ天に向けられているときなんだよ。

---

[1] ゲーテ『ファウスト』3943-3944 行（「ワルプルギスの夜」）。「常緑の宮殿の柱」は「森の木々」を指している。高橋義孝訳（『ファウスト』上、新潮文庫、1998 年）では、「緑の森の円柱のような／幹も砕かれて飛び散ります。」とやや意訳されている。なお発言しているのはメフィストフェレス。

それから歌を作ってる、
どうしてぼくたちの首は垂直ではないんだろう。
この間まじない師がぼくにこう告げたんだ、
首を垂直に矯正することは可能だって。
今度は君が話してくれる番だよ。

　熊
ちょっと待ってくれ。森で寝ていたチビ助に
実は出くわしていたのだ。
か細い前脚、後脚を二本ずつ喰らったら、
奴め東の方を見ている。
逆立つ毛が
全身を走ると、
奴は魚みたいに泳いでいった
空が赤々と燃えている方へ。
なあ、狼よ、一体どうして
天を見上げたいなんて願望を獣が抱いたりするんだ？
本能の言うことを聞くのが悪いことなのかよ――
足下や脇ばかり見て、
人間の菜園に潜り込んで、
道の回りを巡り歩くのが？
考えてもみろよ――狭い穴倉の中、
窓もなければ扉もない所でなら、
動物と野獣の間で
俺たちは神のように君臨できるんだぞ。
つまらぬことに現を抜かすこともある、
飛ぶ鳥を捕まえたりな。
拳銃も猟銃も屁みたいなものだ、
コマドリの頭を食いちぎる痛快さときたら
その餓鬼共を目がけて投げ落としてやるのだ、
乳が吸えるようにな。
だが狼よ、お前が考え付いたのはそんなことではなく、
首の関節を外してみることだとは。

　狼
なあ熊、君の言うことは正しいよ。

愉快になる理由はちゃんと分かるんだ。
ぼくだって多くの者たちを噛み殺してきたんだもの、
よく肥えたのや若いのをね。
全て昔のやんちゃさ。
水平に走るぼくの脊椎は
それからというもの鉄みたいに硬くなってしまい、
ぼくらの目では見ることができないんだ
光がどこから漏れてくるのかを。
ところが上空では星が一つ輝いている――
水車が回る――魔法の星！
その星にぼくは魂を奪われた、
きつく結んだ唇がわなわなと震えてしまう。
ぼくは宇宙の大きさが知りたいんだ
狼は空の上にもいるんだろうか、
地上ではまるで虜囚みたいに
羊のはらわたを食べているけれど。

　熊
笑いたいところだが、
堪えておこう、狼が気分を害してはいけないからな。
こいつは首をぽっきり折ってもいいと言う、
水車みたいな星を見るためならば！

　狼
首の関節を外すために
ある装置をあつらえるつもりなんだ。
そこに自分の頭を差し込んで
どうにかして車輪を回してみる。
そうして首が垂直になったとしても、
ぼくは嫌われて
笑われてしまうだろうさ
友人や貞淑な妻からはね。
でも、本当のことが知りたくて、
なあ、教えてくれよ、勇敢な熊だろう、
友人を怒らせたり
女性の愛撫を軽蔑したりしてはいけないの？

たとえ醜くとも、ぼくは――
狼の生の革新者なんだ、
学問の一端を食いかじって、
皇帝として生きるんだ。
あちこち覆って隠すために、
亜麻布でシャツを縫うつもりだよ、
穴倉では燭台に火を灯そう、
ベッドをしつらえて、トイレを運び込むのさ
一年後　頑張っていれば
ぼくにも勉強の成果が現れるんだ。

　熊
常緑の館の
円天井は未だ破壊されていない！
俺たちのところにはまだ代表がいなさるぞ、
頭のおかしい狼が！
甘美な青春は過ぎ去り、
哀愁の老年が到来した。
もう何もかも分からなくなってしまった、
ただ木々の葉が頭上でざわめくばかり…
だがたとえ俺が保守主義者になろうとも――
お前の思想に用はない、
水洗便所に駆け込んだり、
教養人だなどと呼ばれたくはないぞ。
俺は熊なのだ！　馬殺しだ！
アッシリアの王アッシュールバニパルよ！[2]
俺の憂い顔を目がけて
鉄砲が火を噴くことはない！
貪り食いたいのだ！　噛り付きたいのだ！
とっとと失せろ！　貴様は敵だ！
もはや何一つ理解できない
お前のいかれた頭のことなどな。
さらばだ。俺に分かるのは――お前が強情だってことだ。

　狼

[2] 文物の収集に努め、教養が高いとされている古代アッシリアの王。

こんなふうにして、ぼくは熊と仲違いしてしまった。
悲しいな。でも神はご存知だ――
熊がぼくの決断に手を貸してくれた。

2．森の中のモノローグ

狼の石造りの小屋の上には
太陽と月が輝いている。
狼はカッコウと言葉を交わし、
木々に名前を与える。
彼はキャラコのシャツに袖を通し、
ぶかぶかの変てこなズボンを穿いて、
腰を下ろして書き物をしている、
まるで僧房に籠る修道士のように。
その周囲に連なっている粘土質の丘は
半分が陽光に晒され、
もう半分は影の中に沈んでいる、
こうして一日一日が過ぎてゆく。

　狼（ペンを投げ出す）
きっとこの歌なら
宇宙を創造する粒子をまき散らすことも
未来をさっと垣間見ることもできるのに。
ぼくには分からないんだ――何をどこから始めたらよいのか、
それでも歌を作るのは楽しいよ――
手帳に文字をくねらせてゆけば、
それは天使みたいに歌うんだから！

もう 10 年だ、
ぼくがこの小屋で暮らすようになってから。
本を読み、歌を歌い、
自然とはしょっちゅう会話している。
ぼくの知能は向上し、首もいい方向に向かってる。
でも日々は駆け足で過ぎてゆく。すっかり白髪さ、
時折り背骨がぽきぽき音を立てる。

しっかりしろよ、老いぼれめ。もうひと踏ん張りで、
お前は小鳥みたいに空を飛べるんだ。

ぼくはたくさんの法則を発見した。
もし草木を瓶に差して
鉄製の筒に息を吹き込めば――
その草木は動物の呼気で満たされ、
頭や手足が生えてくる、
そして葉っぱは永久に枯れてしまうんだ。
自分の息を吹きかけることで
ぼくは植物から子犬を育て上げた――
今ではお母さんになって歌っているよ。
一枝の白樺から
駱駝を創り出すことを思い付いたこともあったけど、
肺活量が明らかに足りなかったみたいで――
頭は生えたものの、胴体がなかった。
自然の摩訶不思議な謎かけは
ここかしこにぶら下がっている。
さあその謎を掴もうとすれば、
全身が強張り、目は血走る、
体毛が逆立ち、血管は引き締まる、
しかしその一瞬が過ぎると――愚か者に逆戻り。

幸せな草木だったら生きるのは楽しいさ――
子どもみたいに外で戯れていられるんだ、
でもぼくらは馬鹿みたいに足を使って、
あちらへこちらへと駆けてゆくんだ、
幸せなんてどこにもないのにね。

ある日ぼくは地面に小さな穴を掘ってみた、
そこに膝まで足を突っ込んで
そのまま 12 日間立ち通した。
飲まず食わずで、すっかり痩せてしまったけれど、
足に根が生えることは遂になかった、
ああ、ぼくは植物になれなかったんだ。

でも
知性があれば依然多くのものを聞き取ることができる。
白樺に耳をぴたりと当ててみれば
ひそひそ会話の交わされているのが分かったものさ。
白樺はぼくに自分の経験を話してくれる、
枝の動かし方を教えてくれる、
嵐の後にどうやって根っこを震わせればいいのか
自分の力でどうやって生長すればいいのかを。

だから、まるで多くのことを悟ったみたいだろう、
ぼくは尊敬されることを考えたっていいはずだ。
とんでもない！　獣たちはぼくの周りで
悪態をつき、勉強を妨害する
孤独な暮らしを許しちゃくれない。
おかしな連中さ！　雌牛の首を絞めて、
雄牛を潰したがっているんだ、理性なんてありゃしない。
違う生き方をする者には、
非難を浴びせ、悪意を剥き出し、嫉妬の角を尖らすんだ。

でもぼくは自分の精神が味わうことだったら
全て受け容れてみせる！
研究するうち鼠みたいに体が白くなってしまったよ、
実験中に溺れたのは 4 度、
あるときなんか毛をうっかり燃やしてしまい――
背中が丸焦げになったけれど、ぼくは生き残った。

今や残されている偉業はあと一つ、
でもそれは…隠し立てはよそう――
大いなる墓所に身を横たえ、
目を閉じて土になる覚悟はできているんだ。
星が輝くのを見た者には、
草木と言葉を交わすことのできる者には、
思想の恐るべき化合を理解した者には――
死は恐ろしくない、土になるのは恐ろしくないのだから。

来い、巨大な力よ！

ぼくを掴んで離さないでくれ！　ぼくは樫の木のように生長し、
雄牛のようになり、骨は鋼となり、
白毛はまるで禿鷹だ。偉業を成し遂げる用意はできた。
ぼくを見てくれ！　瞳は輝き、
全身の腱という腱ははち切れんばかりだ。
さあ大きな山に登ろう、
地面を蹴って、ひと跳び、
痩せ細った手で宙を掴み、
自分を鼓舞して、再び跳び上がる、
もう一度宙を掴めば――体が上へ、上へと、
ぼくは飛んでいる、小鳥みたいに飛んでいるぞ！

これが大気圧というやつか！
お腹が空気を吸ってボールみたいに膨れてゆく。
手で押す力は虚空に負けたりはしない。
意志の力は大気に打ち勝つんだ。

ちっぽけな獣よ、その疥癬病みの皮膚に潜む蛆虫よ、
道化帽をかぶった森の浮浪者よ――
ぼくは地上の王だ！　魂の闘士だ！
天に昇ったアルパゴン[3] だ！

ぼくは行くよ。白樺たち、お別れだ。
神のように生きたんだ、辛いことなんてなかったよ。

3．獣たちの集会

　議長
今日は気狂い狼の命日である。
黙祷を捧げよう。

　狼たち（歌う）
子らよ、今年は恐ろしい年。
獣たちの館が円天井を壊している。

---

[3] モリエール『守銭奴』の主人公の名前。転じて守銭奴や吝嗇漢を指す。

古い梁がみしみし音を立てている。
丸々太った鳥たちはチチチと囀っている。

樫の木は嵐で根こそぎやられ、呻いている。
狼は立ち尽くしたまま、腹を空かせている。

二本の川が、谷間から流れ込み、
百のねぐらを水浸しにした。

獣たち、今すぐ起きるんだ、
獣たち、盥を打ち鳴らせ。

嵐と共に、まるで鯨みたいに、
気狂い狼の影が飛んでゆく。

その頭は血に塗れている。
胸の上には草葉がかかる。

足は内側に折り曲げられている。
眼は靄で覆われている。

獣たち、喇叭を吹き鳴らせ。
お前は誰だ、恐ろしい奴。何が欲しいんだ？

ぼくは建設者。ぼくは斧。
君たちの穴倉に勝利した者だ。

　議長
詩人たちがこの歌に描いた
夜を、私は覚えている。
遠いツンドラの地を発った嵐は、
樫の木の皮を剥いでゆき、切株を引っこ抜いて、
木々をひっくり返した。
森は猛り狂った。円天井はびりびり震え、
梁が私たちの頭上に飛んで来た。

シチュー鍋のように大きな稲妻の塊が、
葉叢を貫いて落下し、
木が蝋燭のように燃え上がった。
その木は、まるで獣のように恐ろしい悲鳴を上げて、
枝を揺らし、助けを乞うた。
だが私たちはその下に立ち尽くすばかりで
恐ろしさのあまり指を動かすことすらできなかった。

私は駆け出した。すると目の前に
見たこともないような断崖絶壁が屹立している。
その頂は、頭蓋骨のようにぬらぬらとして、
塵界を絶する美の中に霞んでいた。

またしても稲妻が落ちる。私は気を失った。
上の方、一番高い所で
何かがもがいているのが辛うじて目に入った、
手が宙を掴もうとしている。

私は吠えた。その何かは跳び上がった、
恐ろしい咆哮が私を刺し貫いた、
宙に見え隠れする顔、手、足。
覚えているのはこれで全部だ。

朝になると嵐は過ぎ去っていた、
森の長老たちの焚火は消えている。
私は目を覚ました。断崖はまだけぶっていて、
気狂い狼の死体が石の上に横たわっていた。

　狼の学生
議長殿、我々は皆悼んでいます、
気狂い狼の死は
早過ぎたと。けれど私に一任された
学生協議会が提起した次の
質疑にお答えください。

　議長

言ってみなさい。

　狼の学生
ありがとうございます。短い質問です。
古い森が滅びたことを、我々は皆知っています、
信用しかねないような、
心を惑わす謎は一つもありません。

我々は新しい森を造っています。まだ世界で
誰も見たことのないような森を。結構なことです！
我々皆が事に当たっています――夫も、妻も、子どもも、
誓って――造り上げてみせますよ。

我々は見る見るうちに宇宙を変えていっています
昨日はまだまるっきり愚かだった自分たちも――
今やあなたの前で会議を開いています
技師や裁判官、医師として。

偉大な学問が竜巻みたいにして燃え上がっているのです。
狼がピロシキを食べ、積分計算をしています。
狼が釘を打ち、その一撃で世界を震わせています、
もう工業都市は完成しているんです。

ですから、議長殿、お教え下さい、
どうしてあなたはこの健全な世界の中に投げ込むのですか――
裏切者、変節者、反逆者として――
気狂い狼の馬鹿げた世迷事を？

考えてもみてください――夢想によって植物を
動物に変えてしまうことが可能でしょうか、
地を這う者が空を飛ぶことが可能でしょうか
それによって不死を買い入れることが？

気狂い狼の空想はそもそもいかれているんですよ。
彼はそれに命を懸けました。でもそれが我々にとって何だと言うんです？
我々には新しい世紀の歌が聞こえます、

我々は世界を建設しているのです、でもあなたは――それを避けてるんだ！

　狼の技師たち
私たちは特別な方法で横木を並べながら、
獣の幸福の向こう岸にかかる橋を組み立てています。
ピロシキを焼いてくれる
電動の労働者を製造しています。
内燃機関を搭載した馬は
苦悩の橋を渡って私たちの元に連れて来られます。
ガラスの帽子をかぶった御者は
静かに歌を歌うでしょう。
――さあ、トロイカ[4] よ、
馬力を三倍にしろよ！
地上の建設者の飛翔とは、
後世の者たちがここに君臨できるようにすることなのです。

　狼の医師たち
私ら医師と医科学者は
獣の肉の通訳官です。
狼の頭蓋にガラスの筒を埋め込んで、
脳の働きを観察しています、
被験者の髪型が私らの邪魔になることはありません。

　狼の音楽家たち
僕たちは肉体のバイオリンを奏でるのさ、
学問が僕たちにそう命じているようにね。
僕らは自分たちの鼻を突き合わせて
新しい日々の門を鋸で壊すんだ。

　議長
ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと
驚嘆すべき時代が動き出している。

糸球のように私たちは遠くへ転がってゆき、
その後に自分たちの行いの糸を一筋残してゆく。

---

[4] 三頭立て馬車のこと。

私たちの手は奇跡のような麻布を織り上げ、
私たちの足は何百万マイルもの道のりを踏破した。

悲しみ、飢え、災いに満ちた森は、
あたかも対岸の火事のように遠い存在だ。

獣たちよ、この森を見てみるがいい――
熊が森で雌馬を喰らっている、
ところが私たちは大きなピロシキを食べ、
自分たちの寝ていた穴倉を忘れているのだ。

獣たちよ、この谷を見てみるがいい――
野獣に食われた去勢牛が泣いている、
ところが私たちはと言えば、自分の街を建設し、
魔法みたいな積分記号を書いているのだ。

獣たちよ、この世界を見てみるがいい――
裸のまま、孤独な獣たちが身を寄せ合っている、
ところが私たちはと言えば、学問の剣を掲げ
この世から悪を追放しに行くところなのだ。
ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと
驚嘆すべき時代が動き出している…

目を閉じれば森にガラスの建物が見える。
軽やかな上着を羽織った、すらりとした狼たちが、
長時間の学術会議に熱を上げている。
おや一人の男が場を離れた、
その透明な足を持ち上げて、
ひらりと宙に飛び立った、
仰向けのまま、
風が彼を漂流物のように東へ押し流してゆく。
その下では狼たちの話し声。
――哲学者が去っていったぞ、
まぬけ共に教えに行くんだ、
空の地形図を。

これは何と不思議な幻覚だろう、
魂の気狂いじみた妄想か
それとも知性の産物か、――
物識りの学生よ、解き明かしてくれ！

気狂い狼の空想は馬鹿馬鹿しい、
しかし皆には分かっているのだ、目が開いているのは誰なのかが、――
パンを焼く私たちは一人残らず、
旧世界からすれば変わり者なのだよ。

月日は流れ、幾星霜が過ぎてゆく、
しかし生きとし生けるものは皆、夢ではない。
生きて、そして超えてゆくのだ
昨日は真実だった法則を。

眠れ、気狂い狼よ、その偉大な墓所に！
お前の気のふれた頭を休ませてやれ！
自分では知らないだろう、誰がお前を穴倉から引っ張り出したのか、
誰がお前を孤独と苦悩に追いやったのか。
何も見ずに進め、何にも期待せずに行け、
お前は思考の偉大な将軍としてこの地に歩を刻んだのだ。

お前こそ、鎖の最初の破砕である！
お前こそ、私たちを生んだ川である！

私たちは、世紀の変わり目に立っている、
自分たちの頭が仕事のハンマーなのだ、
私たちは古い森の棺を封印した
お前の傷ついた死体で。

自らの墓所で安らかに眠れ、
「墜落せる偉大なる夢想家」よ。
狼たちよ、私たちはこの夢想家の永遠の事業を進めるのだ
あそこへ――星の彼方へ――前へ！

1931 年